

2. 富山県富山市立寒江小学校

寒江のよさを知り 寒江のよさを未来に残そう

～富山市立寒江小学校におけるE S D初年度の取り組み～

富山市立寒江小学校

■ はじめに

本校は、富山市北西部の農村地帯に位置し、創立明治7年の古い歴史をもっている。全校児童は105名、教職員は17名である。

学校のまわりには水田が広がり、国道や県道が東西南北につながり交通の便もよく、富山市と高岡市の中間に位置し、富山新港周辺の工業地帯にも近い。経済的に豊かな兼業農家が多い。平安時代から寒江郷として荘園の名にも記録された歴史の古い本校区では、地域の人々や諸団体が連携し合おうという気風が強く、地域全体で民謡やスポーツなどに熱心に取り組んでいる。学校教育活動に対しても物心両面からいろいろな支援をいただいている。しかし、この地域でも少子化、高齢化が進み、地域住民の減少により古きよき伝統と文化が少しずつ失われつつある。寒江のよき伝統と文化を次代の担い手である子どもたちに伝えたいという住民の願いは強く、子どもたちにも伝統と文化を引き継ぎたいという思いもある。

平成21年度に富山ユネスコ協会から、「ユネスコ・スクール」加盟へのおさそいがあり、E S D先進校の富山市立中央小学校や東京都江東区東雲小学校等の見学を通して、E S D（持続発展教育）の大切さを認識し、9月にユネスコ・スクール加盟への申請を行った。平成22年5月に加盟が承認されたが、4月からすでに全学年でE S Dに取り組んでいる。

初年度なので、実績というほどのものはまだ少なく、具体性に欠ける点も多くあることをご容赦願いたい。

1 E S D実践に向けた取り組み（平成21年度）

（1）E S Dの認識の共有

平成21年度は県内外のE S D研修会に多くの教員が参加し、E S Dのねらいや先進校の実践内容を校内研修会等で共有した。

【参加した主なE S D関係の研修会】

① H21.8 第1回富山E S D講座
・金沢大学 鈴木克徳：E S D入門
・国立教育政策研究所 五島政一：子どもが生き生き学ぶ授業の創造～地域学の開発～
② H21.8 アジア太平洋E S D教育者会議（東京）
③ H21.10 第2回富山E S D講座
・富山市立中央小学校・・本校教員多数参加
④ H21.10 ユネスコ・スクール研修会in富山
・文部科学省 清水宣彦：持続発展教育とユネスコ・スクールの活用
富山大学 松本謙一：富山県におけるESDの推進
⑤ H21.11 第1回ユネスコ・スクール全国大会（東京）
⑥ H22.1 東京都江東区立東雲小学校
「東雲フェスティバル」-ユネスコスクール活動発表会-
⑦ H22.1 E S Dセミナーin金沢-北陸地区における事例発表会-

（2）テーマの検討とE S Dカレンダーづくり

本校では20年度から「豊かな人間関係の構築」を目指して、学級経営を研究の核として取り組んできた。学級における温かい人間関係を基盤として、さらに、つながりを異学年や、学校・地域へと広げ、共に生きていこうとする共生の心を育むことはE S Dの目的と重なる部分が多いと考えた。そこで、学級の仲間よさ、寒江校区の人や伝統、自然のよさを生かした取り組みの中で、郷土愛を育み、共生社会の担い手として「生き生きと学び合い、学習を楽しむ 寒江っ子の育成」を目指すこととした。

22年度からはこれまでの学級経営を生かし、E S Dを総合的学習の時間や生活科において重点的に取り組むこととした。各学年は今まで取り組んできた学習計画を見直し、取り組みテーマを決め、22年4月から実践開始できるように、東雲小学校並びに中央小学校を参考にしてE S Dカレンダーを作成した。

2 ESD初年度の取り組み（平成22年度）

（1）統一テーマと各学年取り組みテーマ

「寒江のよさを知り 寒江のよさを未来に残そう」

- 1年生…さむえとなかよし大作戦
～さむえの人・人・人となかよくなる～
- 2年生…「さむえのすてき」見つけ隊（たい）
～寒江に生まれてよかったね～
- 3年生…寒江・人じまん
～マイヒーローをしょうかいします～
- 4年生…心と心をつなげよう
～めざせ！心のバリアフリー～
- 5年生…米作りから見つめよう！私たちの食環境
～食の提案書を作ろう～
- 6年生…挑戦！よりよい寒江のふるさとづくり
特別支援学級…見つめよう！私たちの食環境

（2）初年度の主なESDスケジュール

月	校内研修並びに参加した主なESD研修会
4	校内研修 ・研究構想と全体計画の作成 ・各学年の取り組みテーマを定め、ESDカレンダーの見直し
5	授業研修（4年）高齢者疑似体験を行って考えたことを話し合う
6	学校敷地内にミニ水田の開墾と苗植え 学校訪問研修会：全学年がESD授業を行う 指定授業（5年）米作り体験を通して自分の課題を話し合う
7	授業研修（特別支援学級）農産物が少ない食品と、そうでない食品の味を比べよう （2年）「さむえのすてき見つけ隊」で心に残ったことを発表しよう
8	校内研修：1学期の活動の見直し ESDシンポ（富山市がパナ）本校の取り組みを発表
9	ESDコーナーを作成し、取り組みを紹介し合う
10	第1回富山ESD講座（寒江小にて） 公開授業（6年）「よりよい寒江のふるさとづくり」の活動を振り返ろう 授業研修（1年）あきのものをつかったおもちゃをつくって、みんなであそぼう 授業研修（3年）用水の掃除を続ける地域の方の気持ちを考えよう 学習発表会（2年）生活科発表「寒江のすてき見つけ隊」
11	BFC火災予防研究発表会（6年）挑戦！よりよい寒江のふるさとづくり 第2回ユネスコ・スクール全国大会（仙台市） 第3回富山ESD講座（中央小）「中央子フェスティバル」
2	学習参観（2・5年）ESD学習の成果を発表
～	お年寄りとの交流会食・伝承遊び（1年）
3	研究紀要：ESD学習のまとめ作成、次年度用ESDカレンダーの検討

3 取り組みの成果

（1）教師の意欲が高まる

ESD推進のために単元構想の工夫をしたり、教師自ら積極的に地域の人や自然とかかわりを図ったりした。その結果、教師自身が校区に親しみを感じるようになった。また、子どもたちの追究過程に見通しをもったり、目指す子ども像を明確にできたりしたことによって教師の意欲が一層高まっている。

（2）子どもが「寒江のすてき」をより知る

校区内を歩いて調べ、話を聞き、体験することによって子どもたちはたくさんの「寒江のすてき」を知ることができた。郷土の理解が深まることによって、郷土に対する愛着がより一層高まっている。

（3）保護者や地域の方々からの支援が高まる

「寒江のよさ」を子どもたちに伝えるために地域の方々が今まで以上に協力的になった。また、大人も寒江を再認識し、ESDへの理解が進んだ。

4 今後の課題

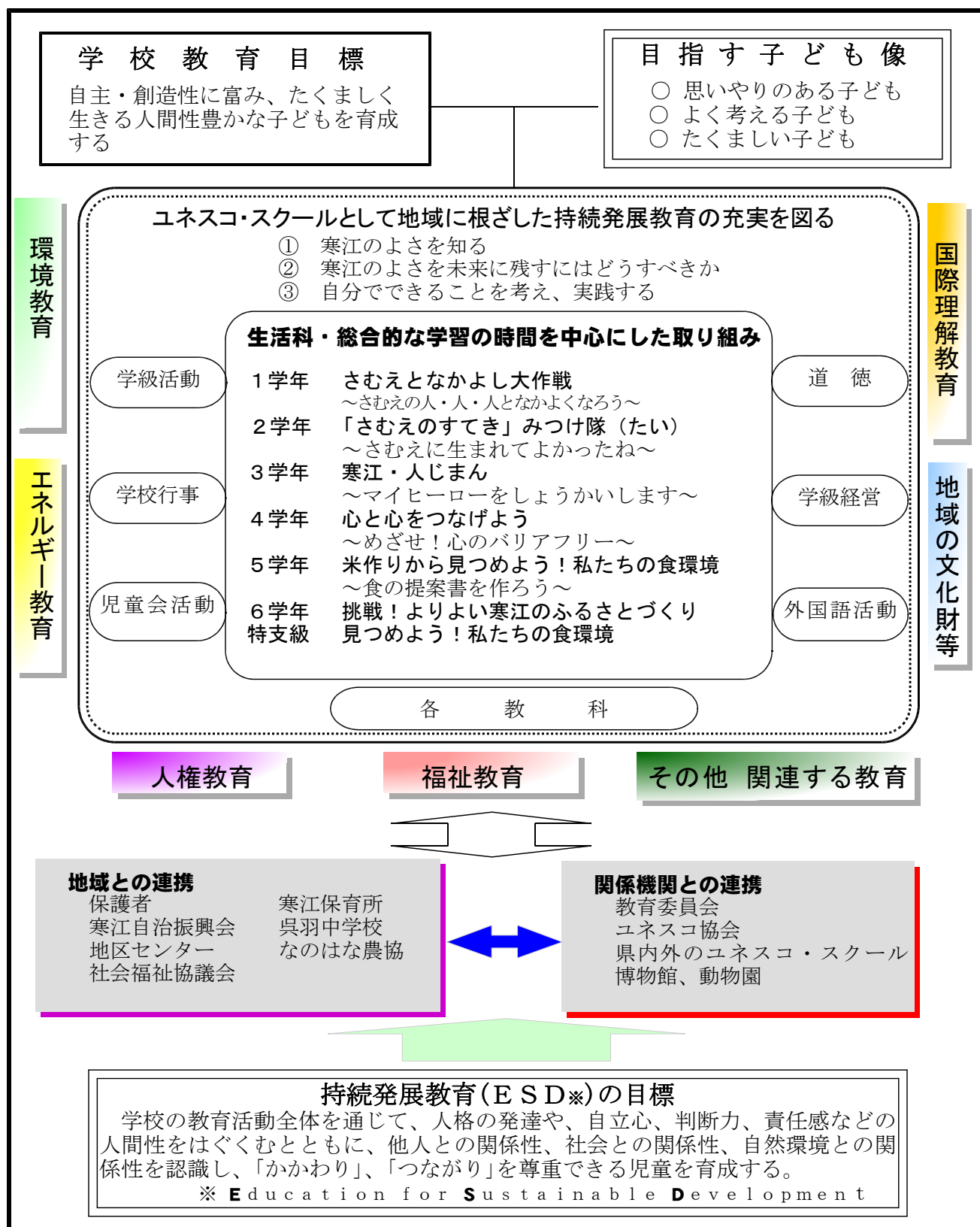
- ①初年度は生活科・総合の時間で取り組んだ。今後、各教科、道徳、特別活動と関連づけて取り組む。
- ②寒江の地域学習から一歩進めて、富山県、日本そして国際理解へと発展させる。
- ③学校と地域を強くつなぐために地域人材や学習資源を発掘し活用する。また、各種機関や施設と連携を図りながら、多くの情報と人材の協力を得る。
- ④学習成果が学年だけで留まるのではなく次年度への財産となるように学習履歴を保存し活用する。

■ おわりに

ESDの実践によって多くの成果と課題が見えてきたが、子どもたちの生き生きと学習する姿や地域の方々が喜んで参加される姿も見ることができ、大変楽しい一年間の活動であった。初年度の取り組みを財産にして、次年度以降の学習に生かしていきたい。

最後に、富山県教育委員会をはじめ、多くの方々や機関から、ご支援やご教示をいただくことができた。特に、ESD実践のために必要な研修の機会やご助言をいただいた金沢大学環境保全センター教授 鈴木克徳先生には深く感謝申し上げます。

平成22年度 持続発展教育(E S D)の全体計画



1 年 1 組 寒江っ子学習(生活科)

1 テーマ

さむえとなかよし大きくせん
～さむえの人・人・人となかよくなる～

2 単元の目標

- ・学校探検や「秋みつけ」等の活動を通して、自分がやってみたいことを決めて、上級生や教職員の方々、地域の人々とかかわることができる。また、その中で、学校生活のよさや寒江の地域のよさをみつけ、自信をもって活動することができる。(関心・意欲・態度)
- ・自分のめあてをもとに、人とのかかわりを深めようと進んで活動するとともに、気づいたことや思ったことを友達に伝えることを楽しむ。(思考・調べ)
- ・学校の施設や寒江の自然のことをよく知ったり、学校生活にかかわる人々、地域の人々と仲良くなったりできたことに気づく。また、それらの活動を通して、学校や寒江の地域に愛着をもてるようになったことや、これからは寒江の仲間たちとかかわりながら生活を送ることの楽しさに気づく。(気付き) (ESD)

3 なぜ「さむえとなかよし大きくせん」なのか ー ESD の観点から

子どもたちの大半は、寒江保育所から入学しており、お互いに気心も知れている。他から入学した子どもたちも共に活動する中で、いつしか同学年の仲間として交流できるようになる。しかし、入学して間もない子どもたちにとって、広い体育館や運動場、名前も知らないたくさんの上級生や先生方などはワクワクする未知の世界であると同時に、多くの不安や戸惑いを感じさせるものとなるであろう。

また、多くの子どもは祖父母と同居しており、何人の大人に手をかけてもらい、大切に育てられている。地域の方たちも子どもたちを温かく見守り、お世話してくださる方が多い。そのため子どもたちは素直で明るい、受け身的になりがちで、自分の思いや考えを伝えるのが苦手な子どもも少なくない。

本単元では、段階を追って、人とのかかわりの幅を広げ、徐々に主体的に人とかかわることができる

ようにしていきたい。まず1学期には、教職員や上級生と好ましい人間関係を築き、伸び伸びと安心して生活できるように「寒江小学校となかよし」に取り組む。学校探検を行い、校内の施設や学校で働く人々を知り、そこからもっと知りたいことを見つけ、もう一度探検に行ったり、教職員と一緒に活動したりする。その上で、人とふれあうよろこびや達成感を味わわせたい。

2学期以降には「地域となかよし」に取り組む。まずは、自然の変化に目を向け、秋へと季節が変わりゆく様子を感じさせたい。グラウンドや公園・神社へ足を運び、寒江の自然を充分に感じられるようにする。その後は、見つけた自然で遊ぶ活動、そして、自然物を使ったおもちゃ作りや遊び、さらには、これまでお世話になってきた上級生を招待した「秋祭り」へと発展させていきたい。ここでは、これまで受け身の立場であった1年生が、主体的に上級生にかかわる姿を期待したい。また、高齢者の方との会食会をふれあいの契機として、高齢者の方にかかわりを広げる活動を展開する。高齢者の方に伝承遊びを教えて頂く機会を設け、繰り返しかかわることによって遊びの楽しさを味わうとともに、身近な地域の人とも楽しく活動することを通して、地域の人々に愛着をもてるようにしていきたい。

3学期には、来年度入学する1年生を迎えての冬祭りを開催し、成長した自分を感じたり、来年度への意欲をもったりすることができるようにしたい。

このように、1年間を通して、学校、上級生・教職員、地域の人々と、人とのかかわりの幅を広げ、「寒江小学校が楽しい」「寒江の地域は面白い」「もっと～したい」などと、寒江に対する夢や希望をもち、相手の喜ぶ顔を想像しながら願いを実現していく姿を期待する。

4 成果と今後の課題

- ・子どもたちは、学校の中に様々な教室があり、それぞれの教室が自分たちの学習に役立っていることを発見したり、上級生や先生方が温かく自分たちにか

かわってくれていることを実感したりすることができた。それらの体験を通して、学校が「楽しいところ」「優しい人がいるところ」などと考えるようになり、学校への親近感を感じることができた。

- ・秋見つけを通して、身の回りの自然が変化してきたことを感じられるようになった。自然物を使った遊びを通して、自然で遊ぶことの楽しみを見つけた。
- ・これまでお世話になった上級生を招待したお祭りを行うことで、これまで他からはたらきかけに応じることが多かった子どもたちが、自ら進んで相手にかかわることのおもしろさを味わうことができた。
- ・新1年生とのふれあいでは、2学期に行った上級生を招待した秋のお祭りの体験を生かし、自信をもって活動する姿、相手の気持ちを考えながら行動しようとする姿が見られた。また、これまでの学校生活で、上級生に優しくかかわってもらった経験が、自分より年下の子どもたちに親切にしたいという思いを強くさせていることが感じられた。

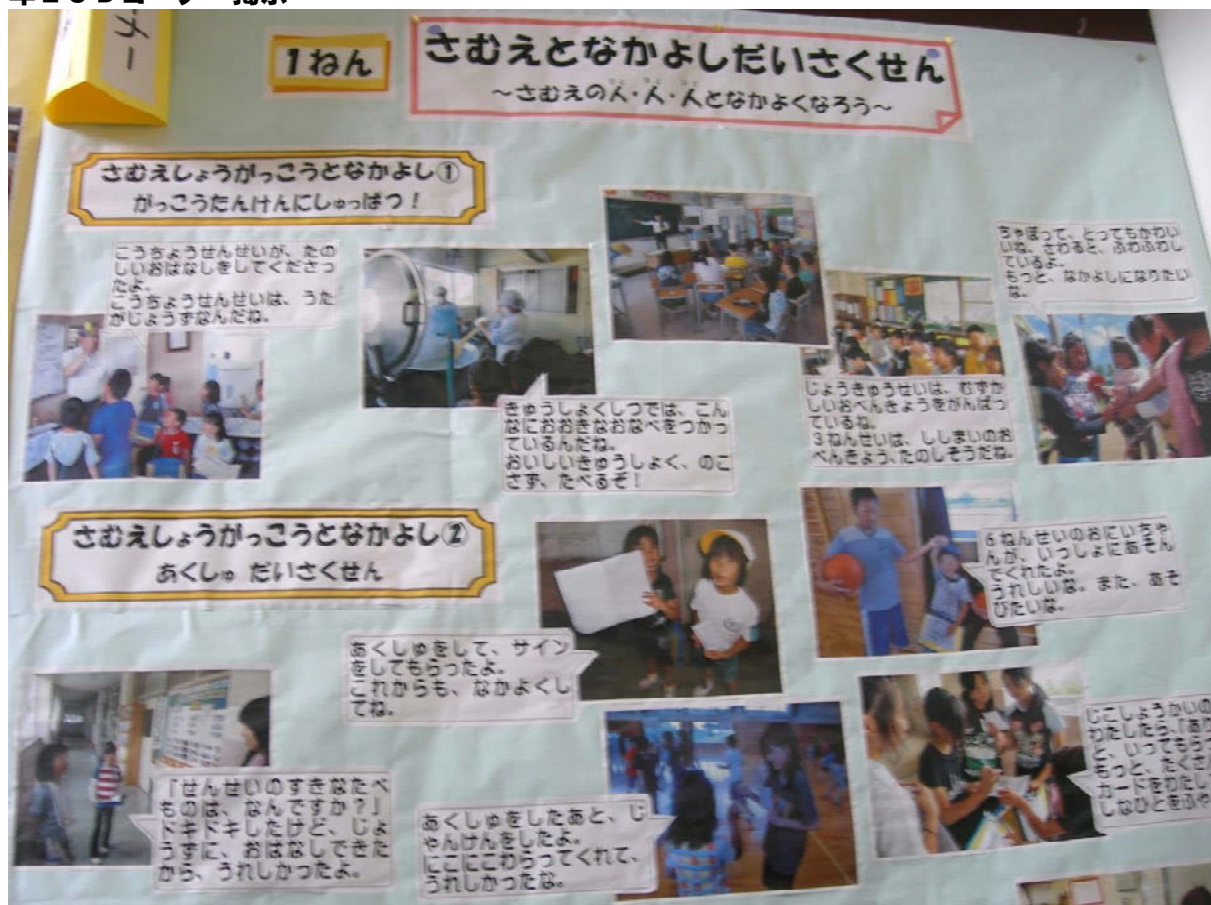
- ・お年寄りとのふれあいでは、自分たちが作ったおもちゃで、遊んでいただいたことにうれしそうにしていたり、お年寄りの方々から自分たちの知らなかった遊びを教えていただいて「物知りなおばあちゃんだな」との思いをもったりして、地域のいろいろな人々とかかわることの楽しさを感じていた。

・(今後の課題)

1年生が、校内で上級生や教職員とかかわるにあたり、十分な活動ができるように、事前の打ち合わせや予定の調整を行っておきたい。また、1年生の実態や「どのようなことを学ばせたいか」など、こちらの意図を伝えることで、より有意義な活動になるように心がけていかなければならない。

地域の高齢者とのふれあいでは、高齢者の方々も、子どもたちとかかわりを楽しみにしておられることを感じた。そこで、互いにとって満足感のある活動となるように、活動の構成を工夫しなければならないと考える。

5 1年ESDコーナー掲示



2 年 1 組 寒江っ子学習(生活科)

1 テーマ

「さむえのすてき」見つけ隊(たい)
～さむえに生まれてよかったね～

2 単元の目標

- ・地域の人や場所、自然などに関心をもち、進んで探検し、かかわりを広げようとしている。
(関心・意欲・態度)
- ・地域を探検してかかわった人や施設や自然、できごとなどを通して気づいたことや楽しかったことを多様な方法で表現し合うことができる。(思考・表現)
- ・地域にはいろいろな人がいて、さまざまな施設やできごと、自然などがあること、それらとかかわることの楽しさに気づいている。(気付き)
- ・探検活動を通して、多様な寒江のよさに触れ、地域への愛着をもつことができる。(E S D)

3 なぜ『さむえのすてき』見つけ隊」なのか－E S Dの観点から

子どもたちは2年生になり、学校生活にも慣れ、全校縦割り活動や学校行事などで活発に活動している。また放課後の生活でも、行動範囲が広がり、生活の場を家庭や学校から地域へと広めてきている。地域は、子どもたちにとって身近な場所ではあるが、未知の場所も少なくない。

そこで、本単元では、子どもたちが学習の場を校区に広げ、今まであまり気づかなかったものや当たり前のように思っていた、もの・人・場所と、五感を通してかかわっていくことを大切にしたい。また、取材や探検活動を通して、地域の人とのかかわりを体験し、あいさつやお礼、話し方なども学ばせたい。それらのかかわりを通して、地域の人々や自然に見守られ、育まれている自分に気づき、自分の将来の夢や目標を抱ける子どもに成長してほしいと願っている。

1学期は、まず自分の住んでいる地区のよさを挙げ、実際にみんな一緒に地域に飛び出して、手でさわったり遊んでみたり、様子を見たり話を聞いたり

するなど、直接かかわる主体的な活動を展開したい。そして、驚きや感動、疑問を共有しながら、「さむえのすてき」を実感させたい。2学期は、1学期の探検からもっと調べたい・聞きたいと思ったもの・人・場所にスポットを当て、グループで探検活動を行う。知りたいことをどんな方法で調べるのかを明確にして、活動を進めさせたい。3学期は家族やお世話になった人たちを招待して、『さむえのすてき』発表会』を開き、探検のまとめを発表する機会を設けたい。発表の中で、「すてきなさむえ」で成長し続ける、自分の将来の夢や目標を語らせたい。

4 学習の流れ

月	活動内容
4 ～ 7	・寒江校区にある6区域の自慢の場所や人(公民館や公園、畑名人等)をクラス全体で探検し、寒江の「すてき見つけ」を行った。 ・見つけたすてきを発表し合い、お世話になった地域の方々にお礼のお手紙を書いた。 ・児童の祖母である畑名人をゲストティチャーとして学んだり、エコ農法の畑でサツマイモの苗植え体験をしたりした。
9 ～ 11	・グループごとに探検したい場所や人を決めて、2回目の探検を行った。 ・見つけたすてきを発表し合い、お世話になった地域の方々にお礼の手紙を書いた。 ・畑名人の祖母の畑で植えたサツマイモのいも掘り体験をした。
10	・5月から10月にかけての探検をもとに、子どもたちが見つけた寒江のすてきを、学習発表会の劇で発表した。
12	・畑名人の祖母に感謝の意を込めた「焼きいもパーティー」を行った。
2	・探検でお世話になった地域の方々や保護者を招待して、見つけた寒江のすてきを発表し、感謝の気持ちを伝えた。

5 成果と今後の課題

- 子どもたちは、身近な居住地区の自慢から始め、いくつもの場所を探検し、地域の方々と触れ合うことができた。地域の方々と交流を通して、優しさや素晴らしさを実感し、見習いたいと思う子どもも見られるようになった。
- エコ農法を営む児童の祖母とは、サツマイモの苗植えから収穫、ゲストティチャーとしての招聘、お礼の集いまで交流の継続を図った。一連の活動が、一児童と祖母の心の絆を深めたと同時に、クラスの子どもたちのエコについての意識を高め、有意義な活動になった。
- 学習発表会ではE S Dの取り組みを、劇の形で発表した際に、子どもたちのセリフを振り返りのファイ

ルから、生の声で取り上げたり、探検の状況を可能な限り再現したりしたことで、地域の方々にも分かりやすく伝えることができたと思われる。

・(今後の課題)

全体での探検3回に対して、グループでの探検が2回と少なく、子どもたちが課題を十分追究しきれなかったと思われる。

また、地域の方の中には、1度の訪問で十分だろうと思われる方もおられ、子どもたちの意欲や、探検の趣旨への理解が十分得られなかった。根気強くコンタクトを取りながら、学習への理解を得られるように働きかける必要がある。

6 2年E S Dコーナー掲示



1 テーマ

～マイヒーローをしょうかいします～

2 単元目標

- ・校區で功績を残した人や活躍している人について調べる活動を通して、その人の生きざまや思いに触れ、自分もこのような生き方をしたいという気持ちをもつ。(E S D)
- ・寒江校區を見つめることで、自分が住んでいる地域に愛着をもち、地域を大切にしようという気持ちを養う。(E S D)
- ・調べたことを整理してまとめ、自分なりの考えをもち、伝え合うことができる。(表現する力)

3 なぜ「マイヒーロー」なのかーESDの観点から

寒江校区は、富山市の西の端にある地域で、人口規模では少ない地域の一つである。しかし、古くは「寒江の郷」と称し現在の呉羽・古沢・老田を含む大きな地域であり、中沖地区には代々大庄屋「十村（とむら）」を務めた豪農もあった。そして、このあたりは加賀前田家の参勤交代のルートにもなっていたことなどから、由緒ある寺社、祭りなどが残されており、そこには地域の人々の伝統を守りたいという心意気が脈々と受け継がれている。

また、校区からは米の優良品種「コシヒカリ」のもとになった「銀坊主」を発見した石黒岩次郎や日本におけるシュールレアリズムの先駆者である瀧口修造なども輩出しており、特に石黒岩次郎の精神は、今も寒江っ子の手本となるべく本校の校章に受け継がれている。

現在でも、寒江校区を盛り上げていこうという人々や、学校や地域のために力を尽くそうという人々が多く、そういった人々は校区の多くの人々と顔見知りであったり、名が知られていたりする。そのことから、子どもたちは知らなくても、家族や地区の人々にとっては、よく知

っている存在であることが多く、ある意味、校区の有名人、子どもたちにとってのヒーローであるといえる。

そして、このヒーローたちは、だれもが寒江校区や地区、学校のために尽力している人物であり、その考え方やものの見方には学ぶべきことが多い。子どもたちには、このヒーローの人となりに触れることで、ヒーローたちの人間としてのすばらしさを知り、学校や地域を思う気持ちに共感させたい。そうすることで、子どもたちは地域の人々のすばらしさを体験的に肌で感じ、地域への愛着が深まると考える。

4 学習の流れ

月	活動内容
4 ～ 7	・寒江出身の偉人の功績をさぐり、地域の人に注目した。1学期に取り上げたのは、稲の優良品種「銀坊主」を発見した石黒岩次郎氏、シュールレアリズムの先駆者の瀧口修造氏、地元本郷地区の獅子舞を伝承する中坪光一氏である。
8 ～ 12	・1学期の学習を受け、2学期は自分の身近にいるヒーローを見つけ、その人がしていることについて詳しく調べ、クラス全体で話し合った。 ・12月24日の寒江小学校創立記念式には全校児童の前で、石黒岩次郎氏の半生を心をこめてペープサートを使って発表した。
1 ～ 3	・調べたマイヒーローをE S Dコーナーで掲示し、全校児童や保護者に紹介した。



5 成果と今後の課題

- ・自分たちが住む地域に住んでいた(住んでいる)人に注目してその人の功績を調べることで、自分たちの地域にすごい人がいるんだなと子どもたちは素直に感心した。また、地域に対する愛着も強まり、自分が地域のために何をしたいのか、何ができるのかを考えるきっかけとなった。
- ・獅子舞を伝承する中坪さんを取り上げた時は、自分の町内の獅子舞がこれからも続いて欲しいと願い、「来年から獅子舞の踊り子をする」と決意を語る子、「自分の町内に獅子舞がないのは寂しい」と語る子がいて、お互いの地域について考えることができた。
- ・自分の地域の中から自分でヒーローを見つける学習では、多くの子どもたちが祖父、祖母、父など、自分の家族を選んだ。自分を慈しみ育ててくれた家族

を誇りに思っていることがうかがえる。地域を見つける時に、まず家庭から、そして、自分の町内、寒江へと身近なところから考えていくことで、より親しみをもって取り組むことができた。

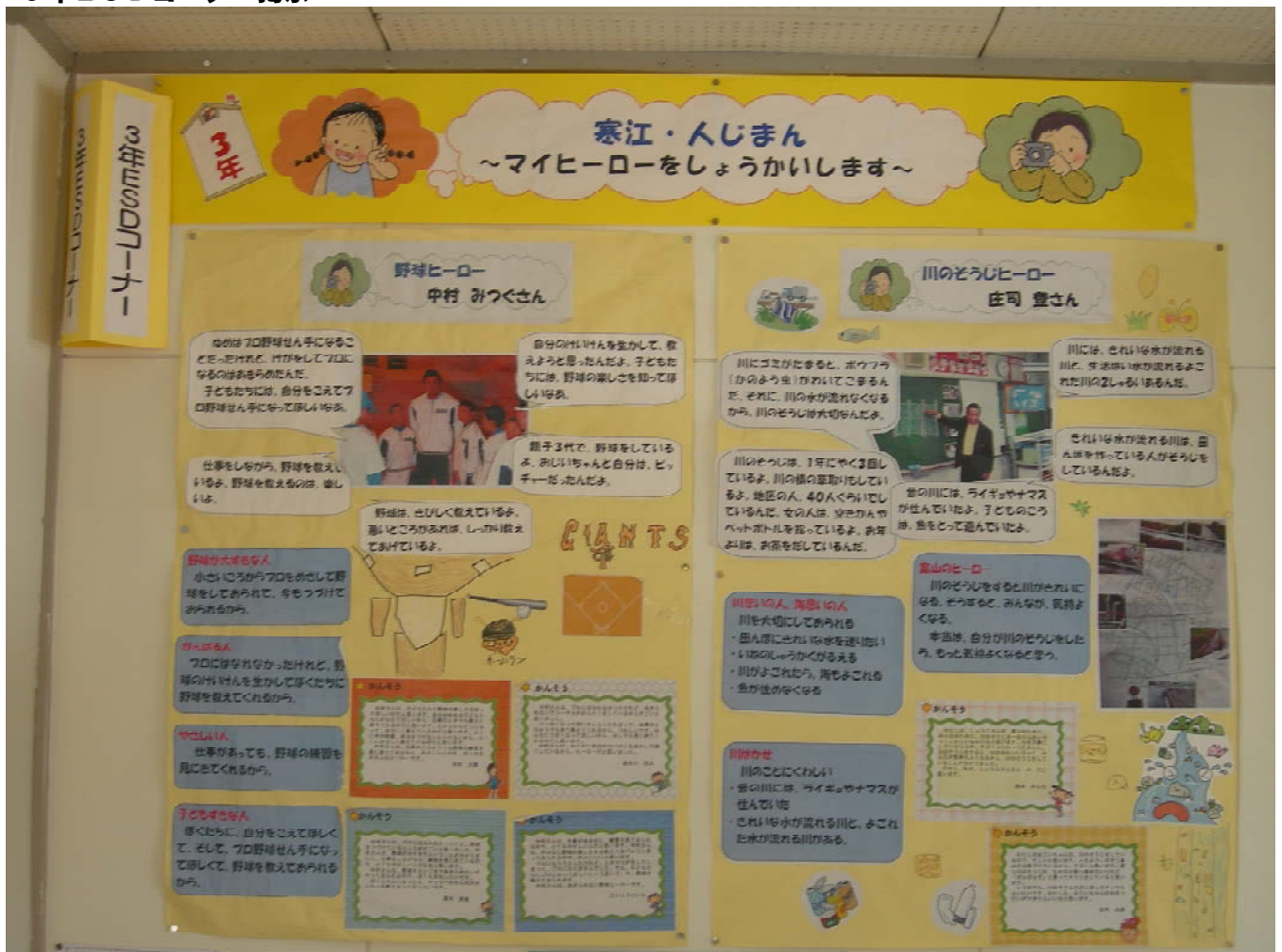
- ・失敗してもくじけず努力を続け、ついに銀坊主を発見した石黒岩次郎氏のような強い人になりたいと願い、がんばりを見せるようになった。

・(今後の課題)

取り上げてきた人物だけでなく、これからも周囲の人に関心をもち、その人の生き方から多くのことを自ら学び続けていこうとする心情を育てるにはどのようにしたらよいか。

寒江に住む人間として、地域のためにできることを実行に移そうとする強い意志をもち続けることができるようにするにはどのような手立てが必要になるか。

6 3年ESDコーナー掲示



4 年 1 組 寒江っ子学習 (総合的な学習の時間)

1 テーマ

心と心をつなげよう

～めざせ！心のバリアフリー～

2 単元の目標

- ・ 交流活動などの体験を重ねることで、多様な価値観を認め、よりよくかかわることができる。(E S D)
- ・ 相手が望んでいることや、自分がすべきことはなにかを考えて行動することができる。(E S D)
- ・ お年寄りや障害のある方と進んでかかわろうとするにはどうすればよいか考えることができる。

(問題を解決する力)

- ・ 自分の考えや活動を、相手に分かるように表現することができる。(表現する力)
- ・ 友だちの活動や考えを見聞きすることで、自分の活動を振り返る事ができる。(自分で評価する力)

3 なぜ「心のバリアフリー」なのか－E S Dの観点から

寒江校区は三世帯同居の家庭が多く、祖父母と一緒に暮らして手厚くお世話してもらっている子どもが多い。また、地域の方々も大変温かく、子どもたちに積極的にかかわってくださる方が多い。本学級の子どもたちも、家族だけでなく、地域の方々に温かく愛情をもって見守られながら暮らしている。

しかし、成人までの半分に当たる10歳となる今、自分がお世話を受けるだけでなく、人間社会への視野を広め、いろいろな人の立場や思いを考えたり、共に生きるために自分ができることを考えたりと、自分から他へのよりよいはたらきかけができるようになってほしい。その際、自分と相手との違いを認め、受け入れたうえで、相手にとって自分はどのようなはたらきかければよいかを考えて実践できるようになってほしいと願っている。

そこで、本単元では、国語科の教材文『手と心で読む』を導入にして視聴覚障害者について考える活動から始める。障害のある方々とかかわった経験の少ない子どもたちであるので、「障害＝かわいそう」

というイメージが非常に強い。しかし、それだけでは一方的な同情心だけで、よいかかわり方とはいえない。同じ人間として尊重し合いながらかわれるようになってほしい。

そこで、大切にしたいのが「心のバリアフリー」という意識である。視覚障害者とかかわるには点字を、聴覚障害者とかかわるには手話を用いたり、お年寄りにはゆっくり大きな声で話しかけたりすることで、「コミュニケーションのバリアフリー」は図れる。それからさらに意識を深め、「障害者」「お年寄り」という相手に対して構えてしまう偏見、つまり「心のバリア」を取り払い、心と心のふれあいを楽しむことで、相手と心をつなげ、より親しみをもった関係を築く姿を願っている。

そのために、障害者やお年寄りの特性と暮らしについての調査活動や体験活動(アイマスク体験やシニアシュミレーションなど)を通してよく知ったり、交流活動を通して、この学習が終わった後も、障害者やお年寄りだけではなく、自分とかかわり生きるすべての人々に対して、真に相手のことを考えた行動がとれるようになってほしいと考える。

4 学習の流れ

月	活動内容
4	・ 高齢者疑似体験を行い、からだを思うように動かすことのできないお年寄りの気持ちについて考えた。
5 ～ 12	・ 高齢者疑似体験で感じた気持ちをもとに、どのように交流していけばよいか考えながら学校に近いデューサービスセンター「よつばのクローバー」の利用者と交流を行った。
1 ～ 3	・ 「2分の1成人式」を通して、今までの自分自身を振り返る活動を行った。名前に込められた親の願いを知り、今の自分はどうかなどを考え、今後の自分を見つめ直すよい機会となった。 ・ 今までの交流で学んだ他者の立場になって考えることと、自分自身を見つめ直し、そのことを生かして最後の交流を行った。

5 成果と今後の課題

- ・高齢疑似体験を行ったことにより、交流の計画を立てる際、子どもたちは、相手のからだのなどを予想できる範囲で想定し、高齢な利用者に無理のないような内容で計画していった。
- ・実際の活動を通して、うまくいかないところを反省し、自分たちの活動を相手の立場でしっかり考え、次の活動計画を立てるようになっていった。
- ・自分たちが「楽しそうだからやりたい」ということと、「利用者さんが楽しい」ということが同じでないことに気づき、友達と何度も改良を加えたり、考え直したりする姿が見られた。また、交流当日でもその場でルールややり方を変更するなど、その場での対応力(応用力)が身についてきた。

- ・交流は、子どもたちが主導して行ってきたが、利用者のがんばりや笑顔から「自分も〇〇さんのように粘り強く最後まで物事をがんばりたい」「〇〇さんが笑ってくれたので、私もうれしい気持ちになった」のように、相手からもらっているものもたくさんある事に気づけるようになってきた。
- ・(今後の課題)

交流活動を通し、利用者に対しては相手の立場で物事を考えられるようになったのだが、普段の学校生活や学級内でのかわりでは、その力が発揮されることがまだまだ少ないように感じられる。

学習を通して身に付けた力を学校生活の中で十分実践できるような構想をしっかり立てていく必要を感じた。

6 4年ESDコーナー掲示

4年 心と心をつなげよう！ めざせ心のバリアフリー

高齢者疑似体験



目…はつきり見えなくなるよ、
色かわかりづらいよ
手…力が入りにくいよ、
細かい物がつまみづらいよ
肘…曲がりづらいよ
腰…前かがみになってしまうよ
膝…曲がりにくいよ、
足があかりにくいよ

実際の生活の中で考えられること

- ・ペットボトルのキャップがあけにくい
- ・カンのフタがあけにくい
- ・お菓子のふくろがあけにくい
- ・はしが使いにくい
- ・食べ物や飲み物を口に運びにくい
- ・立ったりすわったりしにくい
- ・ひざを曲げてすわれない
- ・階段の上り下りがつらい
- ・歩きにくく、段差でつまづきやすい
- ・耳が聞こえにくいので、何を言っているのかわかりにくいときがある
- ・近くに急に大きな声を出されるとびっくりする

よつばのクローバーの利用者さんと交流しよう

《心と心がつながったよ》

- Mさんは左手が不自由で、七夕のたんざくを書いてもらうときに、書きづらそうだった。
- Kさんが歌の時に、手びょう子をしながらいっしょに歌ってくれたよ。
- 「七夕さま」の歌は、たくさんの人が歌ってくれていた。
- ビンゴゲームの数字を聞きにくそうにしていたり、カードの穴を開けにくそうにしていたよ。
- オセロは、ルールが分かってもらえたら、楽しんでくれたよ。
- トランプは簡単だったのか、大勢で楽しめたよ。

たんざくの紙をおさえることができたよ。

うれしかった。みんなが知ってほしい歌だったら、もっとたくさんの方が歌ってくれようよ。「七夕さま」はみんな知っている歌だったんだね。

数字を大きな声で言ったり、カードの穴を開けたりすることができたよ。

ルールが簡単だといっしょに楽しむことができるね。トランプは大勢でできるね。



福笑いで、顔のふちが分かるようにしたら、みんなうまくてできたよ。

けん玉で、Tさんができるまで、何度も挑戦していたよ。ほく達も見習いたいね。

あやとりとコマ回しは、リハビリになっていいねと言われてうれしかったよ。

みんなで活動できると楽しいね。いっしょに喜んだり、はく手したりするともり上がるね。

5 年 1 組 寒江っ子学習 (総合的な学習の時間)

1 テーマ

米作りから見つめよう！私たちの食環境
～食の提案書を作ろう！～

2 単元の目標

- ・現代社会の「食環境」を取り巻く問題点に気づき、自ら問題意識をもって学習課題をもつことができる。
(自ら課題をもつ力)
- ・「食環境」の問題についてこだわりをもち、様々な方法を使って情報を収集したり、必要な情報を取捨選択したりしながら、よりよい暮らし方を考えることができる。
(問題を解決する力)
- ・活動を通して思ったことや考えたことなどを相手に分かるように話したり、資料に分かりやすくまとめたりすることができる。
(表現する力)
- ・自分の身の回りの「食環境」に関心をもち、自分や周りの人たちがよりよく生きることができるように進んではたらきかけることができる。
(E S D)

3 なぜ「食環境」なのか - E S D の観点から

「食」は、私たちの「命」を支えるものであり、生きていく上では切っても切れないものである。しかし、食品添加物、残留農薬や化学肥料、遺伝子組み換え食品、偽装食品など、私たちを取り巻く「食」の現状には、不安な要素がたくさんある。また、海外では日本へ規格内の食品を出荷するためにそこからもれた規格外の食品は捨てられているという現状があったり、国内でも季節外れの食品を栽培するのに大量のエネルギー使ったりしていることは、地球環境を破壊することにつながっている。さらに、私たちの日常生活で排出される生活排水や二酸化炭素は地球環境を汚染し、私たち自身が口にする農作物や水産資源の安全をも脅かしている。このような問題は、先進国に住む私たちが地球環境を軽視し、「食」を含む生活全般に、安易に利便性を追い求めた結果であろう。

また、世界の食糧事情は、世界の 40% 以上の人々が毎日の食べ物に苦慮している反面、15% の人

々は、栄養過多で困っているというほど、貧富の差が大きい。そして、裕福な国の仲間に入る日本人が、食べ物を粗末にしたり、毎日大量の残飯を出したりしていることも事実である。

これらのことから、「食環境」の問題は、私たちの命を支えたり、地球環境に直結したりしているものだけに、非常に大きなテーマであると言える。それだけに、一人一人が自分の暮らしに立ち返り、自分の事として切実感をもって考えることのできる問題でもある。

この学習を通して、日々の自分の食生活に関心をもち、自分や家族の健康を考えて食品選びをしたり、自分の食生活は地球規模で多くの人々や自然に支えられていることを考えることができたり、世界には自分の暮らしとは異なる様々な食糧事情があることを思い描いたりして、どの子どももよりよい暮らしを創っていけることができるようにしたい。

4 学習の流れ

月	活動内容
5	・ゲストティーチャーの水田を見学し、米作りを聞いた。苗植えの見学を行った。
6	・校庭に「ミニ田んぼ」を作り、苗植えを行った。 ・バケツ稲の苗植えを行った。 ・児童の祖母から有機農法について聞いた。 ・農林振興センター所員から肥料について聞き、有機肥料と無農薬で稲作を行うことにした。 ・きな粉用に大豆を植えた。
8	・ミニ田んぼの水管理、雑草取り、害虫駆除
9	・害鳥用かかしの作成。かかしコンクール実施。
10	・ミニ田んぼとバケツ稲の稲刈りを行った。 ・教室で蚕の幼虫の飼育を開始した。
11	・米の脱穀、粳すり、精米。大豆の脱穀。
12	・餅つきを行い、きな粉餅を全校児童に配った。 ・藁を使って縄をない、縄で正月飾りを作った。 ・米作りから各自の課題の調べ学習を行った。
1	・みそ作り体験。大豆の自給率について聞いた。
2	・食の提案書を作成し、発表会を行った。

5 成果と今後の課題

- ・「田んぼで遊ぶ」「自分たちの田んぼを作る」という、からだをかけた活動を行うことによって、子どもたちは大変意欲的に学習に取り組んだ。活動意欲は、問題意識や追究意欲を生み出した。その結果、どの子どもも「安全で安心なお米を作るために」「生き物も安心して暮らせる田んぼにするために」といった課題をもって活動を進めることができた。
- ・子どもたちの問題意識や学びの過程に合ったゲストティーチャーを登用することは、子どもたちの学習に大きな効果をもたらした。子どもたちは、3人のゲストティーチャーとの出会いにより、追究意欲を高めたり、自分の思いと向きあったり、考えをより確かなものとしたりすることができた。
- ・子どもなりの工夫で防鳥対策を行うことができるようにしたり、脱穀・籾すり・精米作業を自分たちの手で行わせたりすることにより、子どもたちは自分たちの取り組みに自信をもち、食べ物大切さを実感することができた。
- ・もちつきや「縄ない」で保護者や地域の方々に協力いただくことは、子どもたちの学習活動を充実させるだけでなく、地域に学校の取り組みを発信することにもつながった。
- ・(今後の課題)
体験的学習と問題解決的学習との比率をうまく組み合わせるように、単元を計画的に構成する必要がある。

6 5年ESDコーナー掲示



6 年 1 組 寒江っ子学習（総合の時間）

1 テーマ

挑戦！よりよい寒江のふるさとづくり

2 単元の目標

- ・調査活動を通して、ふるさと寒江のよさや問題点について考えることができる。（自ら課題をもつ力）
- ・よりよい寒江にするために、自分に何ができるか考え、目標をもつことができる。（問題を解決する力）
- ・目指すふるさとづくりに意欲をもち、自分にできることに粘り強く取り組むことができる。（問題を解決する力）
- ・地域の方々からの多様な意見を聞き、ふるさと寒江の一員として地域に働きかける心をもつことができる。（E S D）

3 なぜふるさとづくりなのか－E S Dの観点から

子どもたちは、これまでの寒江っ子学習や生活科・社会科の学習を、寒江校区を活動の中心に据えて行ってきた。その中で、寒江校区の社会的事象（人・もの・こと）から寒江校区のよさについて少しずつ認識をもちはじめていると言える。しかし、「ここが寒江のよさだ」「ここが寒江の問題点だ」などと、自分たちのふるさとについてそのよさを改めて考えてみたことはないであろう。

そこで、本単元では、まず、子どもたちにこれまでの学習経験（内容・方法）をもとに自分たちのふるさとのよさを考えさせたい。そして、「そのよさをより伸ばしていこう、改善点があれば直していこう」という認識のもと、自らの判断と実行力で自ら行動に移し、町づくりを行うようにさせたい。そして、活動の過程で出会った人々との心の交流を生かしながら、寒江（ふるさと）のよさを再認識するようにさせたい。

今、6年生として小学校生活最後の寒江っ子学習に向き合う子どもたちには、是非とも、自らが考え、自らが行動に移すことを継続的にできる学習をさせたいと考える。

4 学習の流れ

月	活動内容
4	・自分たちのふるさと寒江に目を向け、「ふるさと寒江のよさは何か?」「問題点や改善点は何か?」について調査し、よりよいふるさと寒江にするための活動を考えた。
5 ～ 6	・地域の方々にも意見を聞くために、「寒江のよさやすばらしさ」「問題点や改善点」「取り組んだらよい活動」についてアンケートやインタビューを行って地域の方々と交流した。 ・アンケートの集計を行って、地域の願いを確かめ、自分たちの活動について話し合い、どのように取り組めばよいか計画を考えた。 ・こんな寒江にしたいという願いをキャッチコピーや絵にして表現した。
7	・第1回クリーン作戦を実行し、各地区ごとにゴミを集め、自分たちの活動を全校集会で発表し広めた。
9	・第2回クリーン作戦を実行し、各区域ごとにゴミを集め、よりよいふるさとづくりに取り組んだ。
10	・今までの自分たちの活動を振り返り、その時の思いを話し合い、新たな活動について考えた。
11 ～ 12	・自由なグループでクリーン作戦を実行したり「ゴミを捨てない」「美しいふるさとを守ろう」といったポスターや標語を作成したりした。 ・ポスターや標語を学校周辺や公民館、地下道等に掲示した。
1 ～ 3	・これまでの活動について振り返り、自主的な活動に取り組み、活動のまとめを行った。 ・活動のまとめから、今後の願うふるさと寒江の未来について絵や文で表現し伝えた。

●キャッチコピー「ふるさと標語」

- ・緑よし・空気よし 笑顔あふれる寒江の里
- ・みんなで良くする 寒江のふるさと
- ・Wonderful 自然いっぱい 寒江の里
- ・田んぼがたくさん! 自然豊かな寒江の里

5 成果と今後の課題

- ・ふるさと寒江に目を向け、「ふるさとをよりよくするためにはどうしたらよいか?」「自分たちにできることはないか?」を考えさせることによって、地域に愛着をもち、ふるさとに自らはたらきかけたいこうとする意欲を高めることができた。寒江地区は自然に恵まれ、地域の方々とのふれあいも多いため、子どもたちは意欲的に追究活動に取り組んでいた。
- ・自分の考えだけではなく、地域の方々のアンケートやインタビューを通して地域の方々の思いを知る過程が重要であると感じた。地域の方々の優しさや寒江のよさを感じるよい機会となった。
- ・自分の願うふるさと寒江のイメージをキャッチコピーや絵で表すことで自分の取り組むことが具体的に

なり、意欲が高まったこともよかった。子どもの活動と教師の課題との整合性が今後の活動の課題と感じた。

- ・第1回クリーン作戦でのゴミの量に驚き、自ら地域にはたらきかける活動は意義があると感じることができた。全校集会で自分たちの活動について現状を下級生に訴え、協力を依頼して思いを伝えた。

・(今後の課題)

1年間の長い期間の取り組みであるため、子どもの初めの思いから、地域の方々との交流や実践を通して思いが変容し、活動が変化していくことも考えられる。その時の教師の支援が難しい。子どもの意欲を持続させ、自ら工夫していく活動について更に考えていく必要がある。

6 6年ESDコーナー掲示

